



「仏様が、ちょっと指で車に触られました」-仏様の指

私が教員としてまだ若かった頃(30代前半)、先輩の教員から、この言葉とその意味を聞いてずっと心に残っていました。ある本に具体的に書かれていたので紹介します。

私が若いころ、奥田正造先生から聞いた言葉です。

「ある時、仏様が道端に立っていらっしゃると、一人の男が荷物を一杯積んだ荷車を引いて通りかかった。ぬかるみがあって車はそれにはまってしまい、男が懸命に引っ張っても抜け出せない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。仏様はしばらく男の様子を見ていらしたが、やがてちょっと指でその車に触られた。すると車はすっとぬかるみから出て、男はからからと車を引いて去って行った」というお話です。

奥田先生は、「こういうのが本当の教師なんだ。男は仏様の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して抜け出したのだと自信と喜びをもって車を引いて行ったのだ」とおっしゃいました。このお話は、日がたつにつれ、深い感動になりました。

もし、仏様のおかげだと男が知ったなら、ひざまずいて感謝したでしょう。一人で生きていく自信、真の強さにはつながらなかったのではないかと思うのです。

私が子どもを教え、そのおかげで力がついたとわかれば、子どもは感謝するでしょう。でも、「おかげ」と思っているうちは、本当にその力になっているのではないのです。

子どもが、自分の力で頑張ってきたという自信から、生きる力をつけるように仕向けていくことが、教師の仕事なのだと思います。

(大村はま『灯し続ける言葉』小学館より)

御存知の通り、小・中学校では、様々な学校行事において常に「主役は自分たちである」という意識をもたせたいという願いで学校行事を仕組んでいます。

以前勤務していた学校で、体育祭の実行委員長をした生徒が、体育祭の閉会式で澄み渡る秋空を見上げながら「自分たちの力でこの体育祭をやり遂げた。もう先生なんかいない。」と挨拶しました。しかし、この実行委員長の母親が、後日次のように話してくれました。

「こどもたちは『先生なんかいない』なんて言っていますが、そんなことは絶対に有り得ないのです。こどもたちが自信をもって体育祭の成功に向けて頑張る陰で、どれだけ先生方のサポートがあったことか。見えないところできつとたくさんの指導があったのだと思います。でも、こどもたちに『先生なんかいない』と思わせてくださるよう仕向けていただいていることに親として心からうれしく思っています。」

私はこの保護者の言葉に、教師としてのやりがいを学ばせていただいたと同時に、このように受け止めていただく保護者がいることを本当に有り難く思いました。

このことは家庭での親子の関係においても言えることでしょう。「親に手伝ってもらわなくても、自分の力だけでもやれたよ。」とこどもに言わせ、「やり遂げた」という自信をもたせたい。私たち周りの大人がこどもたちの『仏様の指』でありたいものですね。

文責＝青少年育成センター指導員 大本